# ブレイズ～最初の目覚め～

小堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブレイズ～最初の目覚め～

【Ｎコード】
Ｎ１１７８Ｔ

【作者名】
小堂

【あらすじ】
自分の名前も過去も分からない少女。
少女が目を覚ました時、そこは見知らぬ施設の一室だった。
しばらくの平穏で辛い時間が過ぎた後、唯一の心の拠り所であった女性の死に際を見た少女は覚醒する。
後の【アイリス計画】の発端を描いた始まりの話。

ブレイズ～最初の目覚め～

私がこの世に産まれ、最初に見たのは黒いシミが目立つ白い天井だった。視界がぼやけながらも、私の意識はしっかりとしている。体は動かないが、脳の活動はしっかりとしている。耳は聞こえにくいけど、臭いは分かる。声は出せるけど、言葉が出て来ない。そんなちぐはぐとした感覚。

視線を横にずらすと、ガラス張りの壁の向こうで何人かの人が騒いでいる。声は聞こえないけど、何だか嬉しそうにしているのが分かる。

「あ……あぁ」

やっぱり声は出るけど言葉が上手く出せない。でも、そんな事はもうどうでも良い事に思えてきた。私はこの世に存在している。それだけで十分に思えた。それがとても幸せな事だと思おう。そう心に決めた。

「おはようアイリス」

そんな時、誰かが私に声を掛けて来た。初老くらいの優しそうなおじいさん。震えた手で私の頬を撫でてくれる。その手の温もりは、私が初めて知った人の温もり。その温かさに安心して、私はもう一度眠りについた。

最初の目覚めからどれだけ経った頃だろう。私は屋内に作られた

庭園で花を眺めていた。様々な色の花を眺めているだけで楽しかった。黄色や白、いつまで見ていても飽きが来ない。
「アイリスちゃんは、お花が好きなんだね」
私のお世話をしてくれる女性の『綾乃』さんが尋ねてきた。私は大きく頷いて見せると、優しく微笑んでくれた。私は綾乃さんが大好きだった。お世話をしてくれているからだけでなく、本当に優しい人だったから。
「このお花は何て言うの？」
私は近くに咲いていた小さな黄色い花を指差した。
「これはですね、タンポポと言うお花ですよ」
それから私の一番のお気に入りの花は、この『タンポポ』になった。可愛らしくて優しそうなこの花は、どこか綾乃さんに似ていると思ったから。

苦しい。辛い。助けて。
何度そう叫んでも、誰も助けに来てくれなかった。それでも私は必死に叫んだ。でも、結果は同じ。誰も来てくれない。
腹の中をかき回される様な激痛も、腕を何度も切断されては繋がれる様な感覚も、次第に慣れていき、最後には感覚が麻痺してしまう。そんな事が毎日の様にあの白い天井の部屋で行なわれる。
「良く、頑張ったね……」
そんな時間が終わった後、私が眠りにつくまで、いつも綾乃さんが傍に付いて居てくれる。そして優しく私の腕を撫でてくれる。それが楽しみで、どんな苦痛にも耐えられた。

そんなある日の事だった。私はいつもの様にタンポポを眺めてい

た。けど、何だかいつもと雰囲気が違っていた。でも、その違和感の正体に気付けなかった。

「綾乃さん？」

そうだった。今日は綾乃さんが居なかったのだ。いつも私を見守っていてくれる綾乃さんが今日は居ない。そんな大事な事に気付けなかった。私は急に不安になり、綾乃さんを探し回った。そんなに広い訳ではない庭園を歩き回ったが、見当たらない。今思えば見回せば居るかどうかなどは一瞬で分かる。でも、この時の私はそれが分からなく、必死に歩き回って探した。けれど、どこにも綾乃さんは居なかった。

庭園から部屋に戻るまでの道のりは大体分かっていた。綾乃さんは先に帰ったのだと思い、私は自分の部屋へと戻ろうと、冷たい廊下を歩いていた。

「あっ……たす、けて」

そんな時だった。ある一室から苦しそうな綾乃さんの声が聞こえて来た。瞬間的に嫌な予感がした。それでも、私は恐る恐る扉の隙間から中を覗き込んだ。すると、そこには首を絞められている綾乃さんの姿があった。そしてその首を絞めているのは、あのおじいさんだった。

「綾乃さん？」

私はその光景を良く理解出来ずに立ち尽くしていた。

「やぁアイリス……君も良く見るといい。人が死ぬ瞬間をね」

おじいさんの目が怖かった。初めて人の温もりを知る事が出来た優しい手が、居尼は私の大好きな綾乃さんの命を奪おうとしている。この瞬間、私の優しい日々は尾張を迎えた。

気が付いた時、私の右手には見覚えの無い白い刀が握られていた。刀身から柄の部分まで全てが白い刀。

「何、これ……？」

部屋の壁に大量の血しぶきが付いている。そこはさっきまで綾乃

さんが首を絞められていた場所だった。でも、そこに綾乃さんもおじいさんも居ない。何があったのか思い出せない。それでも私は、衝動的に血の痕をたどる様に部屋を出た。
冷たい廊下に残る血の痕をたどると、庭園にたどり着いた。その庭園の中央に、あのおじいさんが居た。血だらけになりながらも、必死に何かから逃げようと這う様にして花の上を移動している。私はおじいさんにゆっくりと近づいていく。そして、何の迷いも無く、純白の刀をおじいさんの頭に突き刺した。初めて人を殺した。けど、そこには何の感情も感動も関心さえなかった。ただ、周りを見回した時に目に入った花達が、あれ程までに様々な色だったのに、今はどれも紅く染まっている事だけが印象に残った。あの大好きなタンポポも、今は紅く染まっていた。

目が覚めた時、私は白い天井の部屋に居た。あの後、私は自分に何が起きたのか分からなかった。大切で、大好きだった綾乃さんが居なくなってしまったショックと喪失感で、胸がいっぱいだったから。だからもう、何もかもがどうでも良かった。
「目なんて覚めなくても良いよ、ずっと眠っていたいよ……綾乃さん」
そうして私はもう一度眠りにつこうと目を閉じる。真っ暗になった視界に広がるのは見覚えの無い人達の顔。そして見覚えの無い町並みや思い出。
「……！？　ここは、どこ？」
急に怖くなった。私は今の今までこんな見知らぬ施設に閉じ込められてきたのだ。そして意味の分からない実験を繰り返されてきた。こんな恐怖、耐え切れない。
「おい、記憶が戻ったぞ！」
知らない男たちの声が聞こえてきた。私は直感的に身構え、部屋

に入って来た男と対峙した。白い白衣、マスク。見た目からして研究員だと分かる。私の身体は勝手に動き出し、男の首を掴み、そのまま床へと後頭部から叩き付けた。
「ぐあっ！」
意識を無くしたのを確認し、手を離そうとした瞬間だった。首を掴んでいたはずの右手には刀が握られていたのだ。そして男の姿は無い。
「どうして……？」
状況から考えて、私が男を刀に変えたのだと思う。けど、どうしてそんな事が起きているのか分からなかった。自分の身体が、あの実験のせいでこんな変な事になっているかと思うと、吐き気がする。
困惑する頭をそのままに、私は走り出した。考えるのは後でも出来る。今はただ、この奇妙な施設から逃げ出す事だけを考えよう。そう心に決めて……。

どれくらい走ったのだろうか。足の裏の感覚が無くなっていた。どれくらい人を殺したのだろう。最初に持っていた刀が血だらけになって刃が欠けている。私の身体も白い服も、返り血で紅く汚れている。
「これからどうなるんだろう……」
真っ暗な夜空を見上げながら、一人呟いた。現実問題、全く覚えの無い施設から抜け出せた所で私には行く当てが無いのだ。自分が今どこに居るのかさえも分からず、ここが日本であるのかどうかも分からない。こんな状況になるのだったら、いっその事あの施設に居た方が良かったのかもしれないとさえ考え出してしまった。
「綾乃さん……」
記憶の無かったあの頃の記憶も僅かに残っていた。あの綾乃と言う女性の事だけは辛うじて覚えている。でも、それ以外の記憶はハ

ッキリとは思い出せない。何だか、どの自分が本当の自分であるのかさえ分からなくなる。思考を廻らさせるほどに絡まっていく終わり無き堂々巡りに、私はいい加減嫌気がさした。

「とにかく、今は歩こう」

そう言って私は道無き森の中を歩き出した。行く当ても無く、ただ黙々と一人で……。

## （後書き）

初めまして、小堂（しょうどう）と言う者です。
初めての投稿作品です。
この小説はこれから連載する予定の小説の第０章に当たる話です。
この小説を読んで興味が沸いた方は本編の方もご覧になってください。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1178t/

ブレイズ～最初の目覚め～

2011年5月8日17時25分発行